

地方都市における コンパクト&ネットワークの意味

— 立地適正化計画に必要な覚悟とは —

弘前大学 北原 啓司

1. コンパクトシティの意味を本当にご存じですか

★言葉だけが一人歩きしています

G.B.ダンツイヒ&T.L.サティ(1973年)

都市問題解決のための高密度な人工空間

25万人都市・直径2.65km、高さ72mの円筒
8層

○自動車の普及による都市の低密拡散の進展

○地球環境意識の高まり



自動車に依存しすぎないまちづくり

EC「都市環境に関する緑書」1990年

- ① 都市部での環境汚染を防ぐ
- ② 緑地での新規開発を抑える
- ③ 歴史的文化財を保全する(保存≠保全)
- ④ 都市の再生、持続的な経済開発を進める

都市のぶざまな拡大の抑制、公共交通の促進
→ 持続可能都市(サステナブルシティ)

EC「サステナブルシティ・レポート」1996年

サステナブルな開発の原則

- ① Urban management (マネジメント)
- ② Comprehensive policy (包括的政策)
- ③ Eco system (エコシステム)
- ④ Partnership (官民連携)

★しかし、コンパクトシティはこう表現されました

ある先生の定義は

縮退都市(シュリンク・シティ)

ある県庁は、スマート・シュリンク(賢い縮退)

しかし、そもそも米国では

スマート・グロース(賢い成長)

3年前の日独シンポジウムでは

なぜ日本人は、縮める、集約すると言う？

○いまさら、形を縮めるなんてあり得ない！

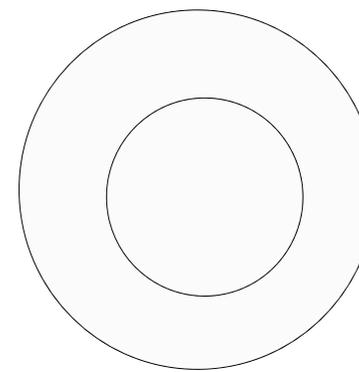
○とりあえず、除雪費を抑えたいだけか？

★コンパクトシティに対する大きな誤解

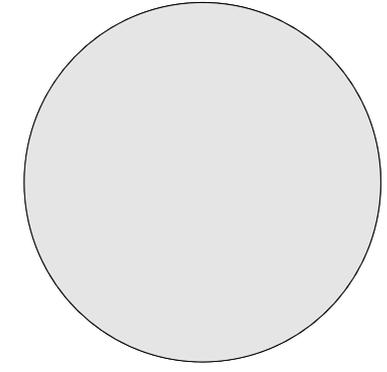
- ・今さら形を縮めることなど不可能ではないか
- ・何故自分たちの開発を抑制しようとするのか
- ・何故このような不景気な社会であるにも関わらず規制緩和をしてもらえないのか
- ・郊外住宅地に今後は予算がまわらないのか
- ・何故、商業関係者ばかり優遇して、農業関係者には規制ばかりなのか
- ・そもそも合併の時代に、現実的ではない
→薄っぺらの、「コンパクトシティ論」

5

世界の5大コンパクトシティ「富山市」でさえ・・・



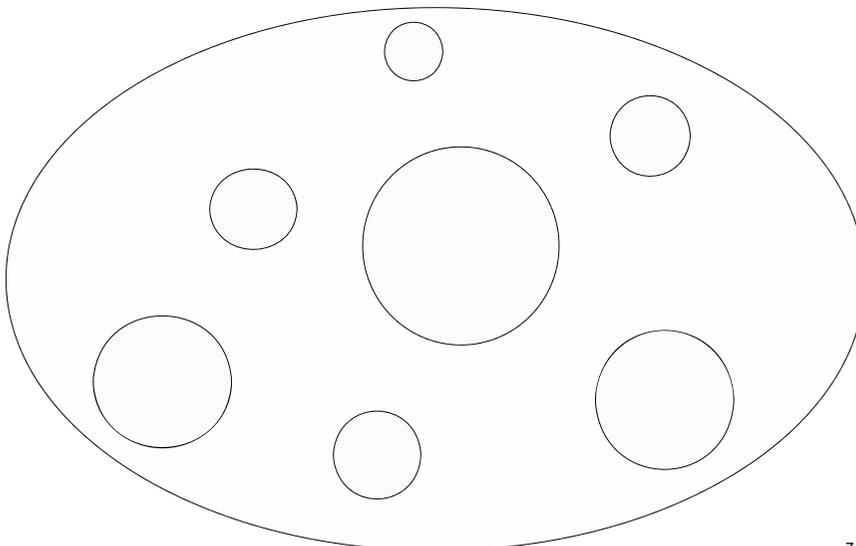
都市が縮む！？



都市が元気になる！

6

★合併した都市でもコンパクト？



7

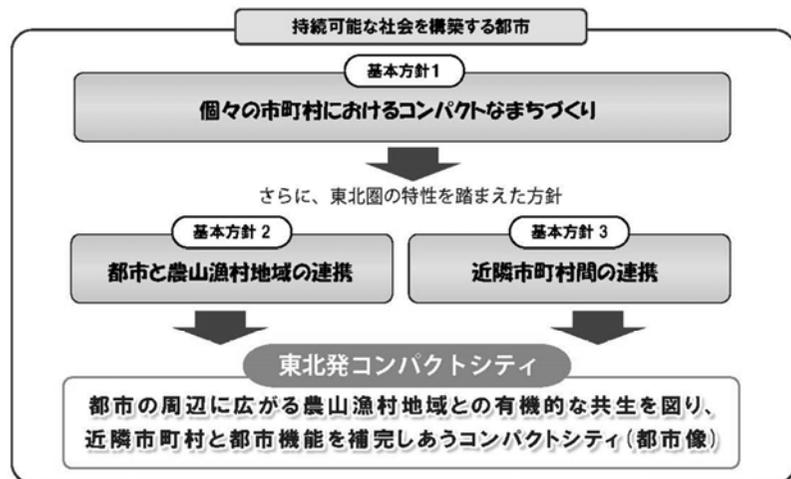
★でも、少し変わってきました

国土のグランドデザイン2050 概要② 国土交通省

<p>キーワードは、コンパクトネットワーク</p> <p>コンパクトネットワークの意義・必要性</p> <p>①質の高いサービスを効率的に提供 人口減少下において、各種サービスを効率的に提供するためには、集約化(コンパクト化)することが不可欠</p> <p>②しかし、コンパクト化だけでは、圏域・マーケットが縮小して、より高次の都市機能によるサービスが成立するために必要な人口規模を確保できないため</p> <p>このため、コンパクト化により、各種の都市機能に結びつけた圏域人口を確保することが不可欠</p> <p>③新たな都市構造</p> <p>コンパクトネットワークにより、人・モノ・情報の高密度な交流が実現</p> <p>④高度な交流がイノベーションを創出</p> <p>⑤また、圏域の創出により、地域の歴史・文化などを継承し、さらにそれを発展</p> <p>⑥コンパクトネットワークにより「新しい集約」を形成し、国全体の「生産性」を高める国土構造</p>	<p>人と国土の新たななかかわり</p> <p>①の多様性を支えるふるさと</p> <p>多様性のある地域で暮らす中で、人は地域に愛着を持ち、そこで暮らしたいとなる。ふるさとが長い年月を経て、それぞれの文化を育み、人は地域の文化を呼吸しながら生きていく存在。住み慣れた地域に住み続けたいは最も大抵していかねばならないものの一つ</p> <p>②第一のベクトル(円周)から2つのベクトルへ</p> <p>2つのベクトル(放射志向と地域志向)の下、国土、経済、地域、暮らしなどの各分野で戦略的サブシステムなど、多角的な仕組みを取り入れることが必要</p> <p>③新しい「集約」</p> <p>人々の各々の地域活動などに積極的にかかわって、新しい「集約」の時代へ</p> <p>④女性の社会参画</p> <p>女性の就業率向上を目指すの前提、男女がともに仕事と子育てを両立できる環境を整備し、女性の社会参画を推進</p> <p>⑤高齢者の社会参画</p> <p>元気な高齢者が知識、経験、技術を活かして地域で社会参画</p> <p>⑥ICTの活用</p> <p>人が遠まよかたくなることで、重要な舞台となるICTが、都市化、移住・移転等の中で積極的なICT活用を推進し、多様な生活型でサブシステムを創出</p> <p>⑦各層の少子化対策と向きあって、国民の希望通りに子育てを育み育てることができる環境を整備することにより、出生率が回復し、中長期的に人口規模を維持</p>
<p>多様性と連携による国土・地域づくり</p> <p>①人口減少社会において、各地域が得意げを磨きながら、それぞれの地域は意欲を高め、サービス機能や環境創造機能が劣化</p> <p>②しかしながら、我が国が長い歴史の中で育んできた多様性が、近代化や経済発展を遂げる過程で徐々に喪失</p> <p>③このため、</p> <p>④まずは各地域が多様性(多層構造)を再構築し、主体的に自らの発展に意欲をかけることが必要</p> <p>⑤その上で、複数の地域間の「連携」により、人・モノ・情報の交流を促進していくことが必要</p> <p>⑥これにより、多様性を有する地域間で1)機能の分担・補完、2)規模を拡大し、3)融合し、高次の発展が図られ、圏域に対する高次のサービス機能の確保と新たな価値創造が可能に</p> <p>⑦このように「多様性と連携」を軸に、地域の多様性をより豊かにしていくのが、コンパクトネットワーク</p> <p>⑧コンパクトネットワークは、50年〜100年の長遠な視点を取り込み、圏域の制約を克服するとともに、実効的かつ協働「積極的期間」を融合させる</p> <p>⑨「圏域」は、自治体(市町村) - 広域連携圏(広域行政圏) - 広域連携圏(広域行政圏)</p> <p>⑩人・モノ・情報の交流はそれぞれの地域が多様であるほど活発化(一対多)</p> <p>⑪対話のエンジン(温度差(地域間の差異)がなければ対話は起こり得ない、)</p> <p>⑫常に多様性を生み出し続ける</p>	<p>世界の中の日本</p> <p>グローバル化の中で日本が存在意義を失いつつあることは、日本独自の価値を磨いて、世界のみんなに多様な価値を提供できる後とする必要</p> <p>このため、全国をまたぐ多様な価値のある地域へ、地域の宝を見出し、それを磨き、世界への価値提供を積極化</p> <p>2050年の未来をイメージしながら、実現に向けて、様々な変化を予測し、見据えるためのプランニング</p>
<p>災害への粘り強しやかな対応</p> <p>①災害に対する安全を確保することは、国土づくりの大前提</p> <p>②防災の立地、対策を立上げることが重要。一方で、災害に対する安全の確保はグローバル社会における我が国経済とその雇用力の基盤</p> <p>③巨大災害のリスクを軽減する観点からも、自然と連携する東京一極集中からの脱却</p> <p>④災害が発生しても人命を奪わず、社会的ダメージを受けず、災害に強い国土づくり</p>	<p>国土づくりの3つの理念</p> <p>多様性「ダイバーシティ」</p> <p>連携「コネクティビティ」</p> <p>災害への粘り強しやかな対応「レジリエンス」</p>

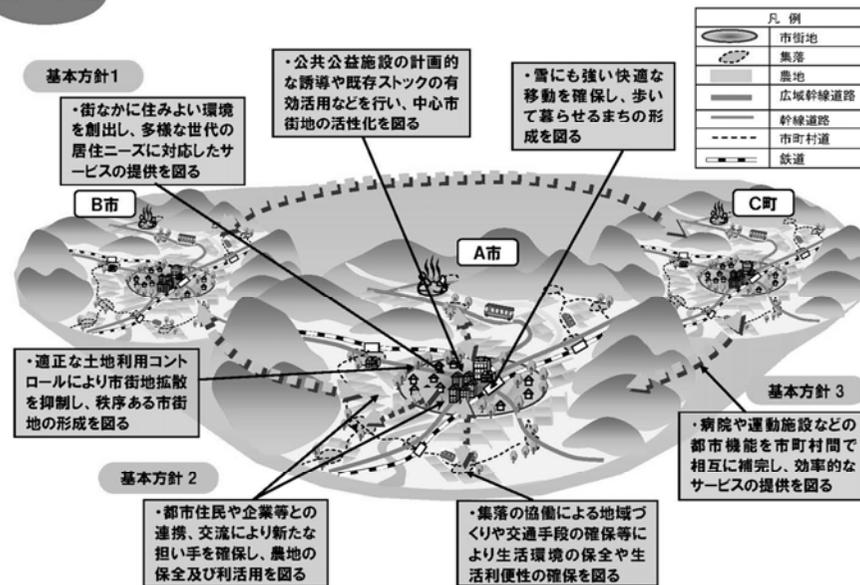
8

★背景には「東北発コンパクトシティ」
(国土交通省東北地方整備局)

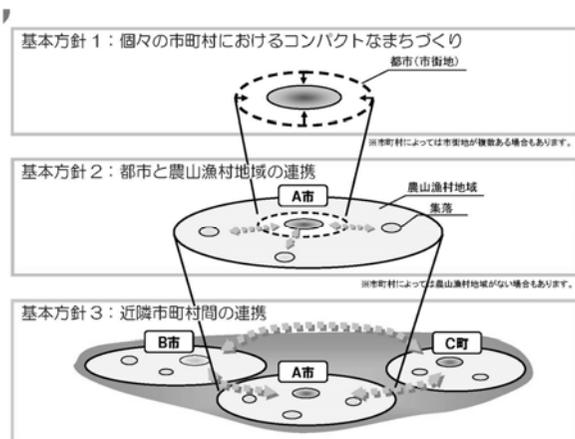


9

イメージ図



★コンパクトシティだからこそ必要な「つながり」
東北発コンパクトシティが示すネットワーク像



マクロな「つながり」とミクロな「つながり」の必要性

11

①質の高いサービスを効率的に提供

- ・人口減少下において、各種サービスを効率的に提供するためには、集約化することが不可欠
- ・コンパクト化だけでは、圏域・マーケットが縮小してより高次の都市機能によるサービスが成立するために必要な人口規模を確保できないおそれ

- ・ネットワーク化により、各種の都市機能に応じた圏域人口を確保することが不可欠

果たして、これまでのネットワーク論の延長で、いいのでしょうか

誰のためのネットワーク

東京まで何分 → 新幹線は誰のため？

12

②新たな価値創造

- ・コンパクト+ネットワークにより、人・モノ・情報の高密度な交流が実現
- ・高密度な交流がイノベーションを創出
- ・賑わいの創出により、地域の歴史・文化などを継承し、さらにそれを発展

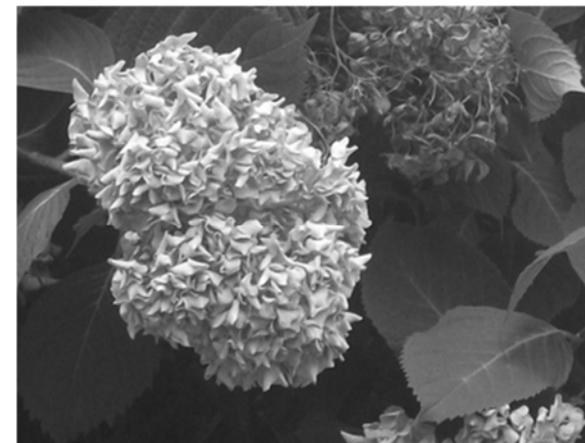
コンパクト+ネットワークにより「新しい集積」を形成し、国全体の「生産性」を高める国土構造成長の時代の戦略！？

↓
超高齢社会における豊かさとは

13

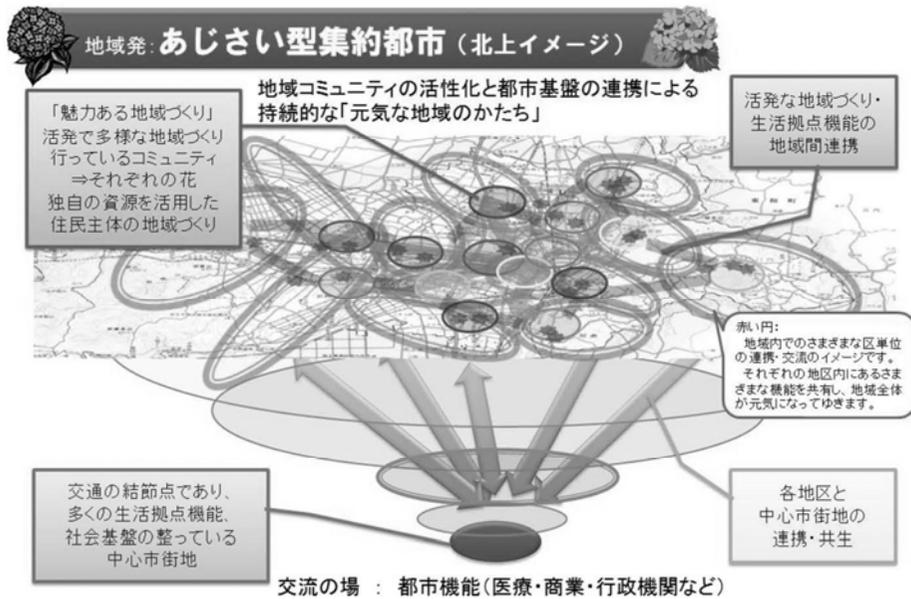
2. 地方都市の中山間地とコンパクトシティ

北上市(岩手県)は、上手な表現を見つけました
「あじさい都市」



14





★マイクロなつながりの可能性
北上市の「NPO法人くちない」の活動
～交通の空白地域に「場所」を生み出す～



★中山間地域におけるモビリティ確保の現状



口内線(綾内→口内→北上駅前) バス交通の悲しい現実

「NPO法人くちない」(理事長：昆野先男氏)
地域の現状に向き合い、住民のみで2009年に設立

事業内容

- ・ 高齢者の福祉向上を図る事業
- ・ まちの活性化を図る事業
- ・ 次世代に地域の魅力を伝える事業
- ・ 都市部と農村部の交流を図る事業
- ・ 地域の魅力の保全・開発を図る事業
- ・ 特産品開発及び販売
- ・ 里山保全などの森林管理委託業務
- ・ 旅客運行に係る業務

有償運送サービス

運転研修を受けたドライバー(住民)が、地域住民を送迎するサービス

名称	対象	行き先
過疎地有償運送 (町内型運行)	口内町自治協議会 加入世帯全員 (年会費1000円)	口内町内
福祉有償運送 (福祉型運行)	障がい者 要介護者 要支援介護認定者	市街地3カ所 ・医療機関 ・金融機関 ・市役所

21

今日まで成功している理由

○バス業者との連携

バス路線の停留所と、自宅との運送が目的
なるべく既存のバスには乗ってもらうことで
既存の公共交通機関を維持

○地域に密着した小さな商店

「店っこくちない」設置による複合効果
高齢者の買い物支援を目的に2009年設置

22



23



「店っこくない」の販売品目



利用者の声

A:「欲しいものを揃えてもらえて助かる」

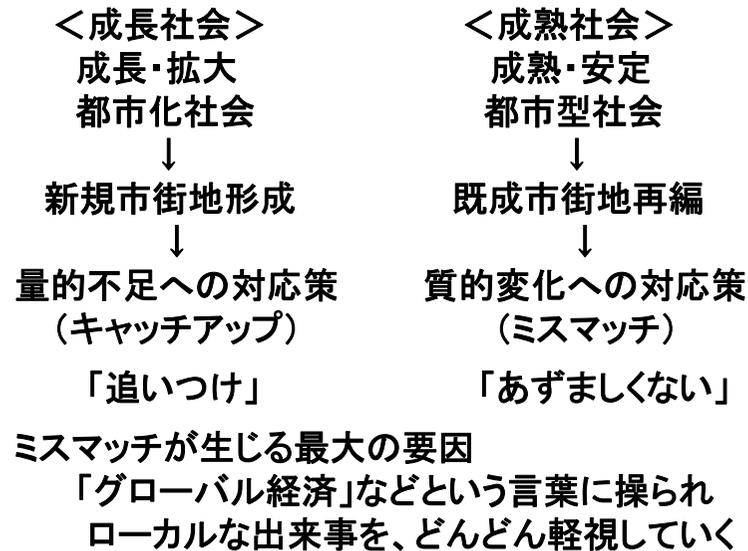
B:「自家用車を持っていないので、市街地に行かなくとも助かる」

C:「従業員や他の客と会話することも楽しみ」

購入を終わっても
店舗に残り
従業員と会話を続ける



3. 超高齢社会(成熟社会)の豊かさとは



★グローバル化

我が国に今まで以上の変化をもたらす

※市場メカニズム

資本が要求するスピードに対応する
⇔成熟・安定

<グローバル化>
スピード
均質化
市場
↓
アメリカモデル

<ローカル化>
スロー
個性化
文化
↓
ヨーロッパモデル

(1)アメリカモデル

成長の時代のアメリカ神話

だれも疑わない成長戦略

超高齢社会の到来

グローバル化がローカルに不安定をもたらす



ローカルの民力が試される時代

- ・まもり、つくる文化
- ・育てる風景
- ・都市と田園との未来に向けた共存
- ・豊かな人間関係や日常生活



アメリカモデルでは難しい

29

(2)ヨーロッパモデル

持続可能性を基礎とした都市づくり

グローバル化の進展

人々はコミュニティへの帰属を希求する



手の届く距離、身の丈、生活感

⇒ ローカル化の進展



成長の時代の公共政策では手に負えない

NPOや市民、企業等の連携

⇒ 市民的公共性

生活の舞台としての都市空間に
コミュニティの知恵を結集させる

30

★「上から目線」に陥るアメリカモデル



★人の流れを生み出すヨーロッパモデル 杵築モデル



32

★この女の子の眼差しを、超高齢社会でどう生かすか

空間の提案ではなく、地域で味わう物語の提案

※上から見るまちづくり → 舞台の配置を考える
成長社会では、プロデューサーも役者も
次々に押しかけてくる

※通りを歩く視線を大事にするまちづくり
誰もが役者になり観客になる

- 歩いているのは、誰なのか
- どこで、なにが見えるのか
- なぜそこにこだわってみたいのか
- そこでどんな出来事が生まれるのか
- どうやって物語をつなげていくのか

→ エリアマネジメントの発想！

33

成熟社会にとって、いま、本当に必要な視点とは

次代に向けた地域の人材を育てる視点



- 自分たちでまちを何とかしたいと考える人々
- ◎自分たちの「場所」を持ちたいと考える人々
まちづくりのプロではないはず
→ まち育てのプロ

「空間」に人々の想いと

生き活きとした行為が加わると、

そこは、「場所」になる

★「まち育て」は、「空間」を「場所」に変えること
空き家が……、空き店舗が
空き地が……、

34

4. 真のコンパクトシティ政策における「まち育て」

今こそ必要な発想の転換

- を集約する → ○○を活用する
- をたたむ → ○○を使い倒す
- をつくる → ○○を育てる

究極のFM(ファシリティ・マネジメント)



ところが、これを勘違いしている自治体があります

- 人口が減少しているのだから、ここは廃止
- 立地適正化計画で、それを明確にすべき
- とにかく集約していくのがコンパクトシティ

★FM:ファシリティマネジメント

○不動産(土地、建物、構築物、設備等)すべてを
経営にとって最適な状態にする

コスト最小、効果最大

○それらを保有し、運営し、維持するための

総合的な管理手法

○保有・管理するすべての施設を対象として、竣工後、うまく使っていくために必要なあらゆるマネジメント



ややもすると欠如してしまう「育てる」発想

施設を廃止するための手法という誤解

本来はうまく機能させるための知恵や工夫

36

立地適正化計画のことを「第2の線引き」
と表現する人がいます

しかし、時代は違います

線引きが登場したのは、まさに成長の時代

〇〇したい

〇〇ができるのはここだけです！

人口減少社会では、どう考えればいいのでしょうか

できれば〇〇したくない



本当は〇〇すべきではないのですか？

37

★そもそも、だれにとって適正なのでしょうか

都市機能誘導区域

居住誘導区域

この区域設定がテーマだと勘違いする人々

区域外は、もうこれから、投資の対象外？

地域住民をどうやって説得すればいい

とにかく都市再生特別措置法の支援が欲しい

考え方が逆なんです

どこを〇〇区域に設定するか



この地域を〇〇区域と考えていって大丈夫か

宣言する覚悟はあるか

覚悟のある都市こそ、真のコンパクトシティでは

たとえば、青森県の2つの都市

①弘前市

うちは、コンパクトだから、すべて居住誘導区域
スプロールもしていないし・・・

だからこそ既成市街地の再編集が必要

居住をちゃんと考えていきますよね

→空き家対策、公共交通の再配置

②むつ市

そもそも、うちは、線引きもしていないし

だから、白地にいろいろと建ててきた(無計画)

だからこそ、それを制度的に後付けする

ここは、そのまま住宅中心でいいよね

自分の都市のマスタープランのために

立地適正化計画と支援策を活かしきる

★立地適正化の時代のコンパクトシティとは

立地適正化計画を活かしたFMそのものである

○賢くない成長を続けてきた各自治体が
成長の時代から成熟の時代にシフト
していく中で、どのような考え方で、
自分たちの地域の将来像を描いていくか！

○誰かに適正な区域だと判断してもらうのではなく
この区域で地域の人々が生活していくことを、
自信を持って正しいと言える都市計画

○現実を正確に市民に伝えた上で、それでも
その地域に住み続けたいと考える市民と
一緒に計画を進めていく覚悟の時！